◆ 行橋市制70周年記念プレイベント

シンポジウム

知の巨人・末松謙澄（すえまつけんちょう）と『源氏物語』

▶ 20代の末松謙澄
（末松謙澄『国歌新論完』より「二十年前の青萍博士」）

▲ 源氏物語図屏風（部分）

日時 令和6年2月12日（月・振休）14時～

場所 コスメイト行橋・文化ホール

【主催】行橋市教育委員会・行橋市

ごあいさつ

令和６年１月より、紫式部が主人公のNHK大河ドラマ「光る君へ」が始まりました。その紫式部の代表作『源氏物語』を 19 世紀末の明治時代に世界で初めて英訳出版し、海外に広く日本文化を紹介したのは、行橋市出身の政治家であった末松謙澄でした。

今回のシンポジウムは、行橋市制70周年のプレイベントとして、郷土が生んだ知の巨人・末松謙澄と『源氏物語』との関わりをテーマに開催いたします。

このシンポジウムの開催が、日本の夜明けに政治家としてだけでなく、文化人としても優れた業績を残した末松謙澄への理解を深め、改めて郷土愛を醸成する機会となれば幸いです。

行橋市長　工藤 政宏

シンポジウムプログラム

14:00　開 会
14:10　講演「末松謙澄という人―イギリス留学までを中心に―」　城戸 淳一
14:45　招待講演「末松謙澄と源氏文化―江戸から現代へ―」　佐野 みどり
15:30　企画展解説「『源氏物語』の時代と京都平野」　小川 秀樹
15:45　休 憩
16:00　パネルディスカッション
【パネリスト：城戸 淳一 ・佐野 みどり・小川 秀樹】
【コーディネーター：島尾 新】
16:45　閉 会

講 師 / コーディネーター紹 介

城戸（きど） 淳一（じゅんいち） 〈小倉郷土会会長・行橋市文化財調査委員〉

1941年、福岡県行橋市生まれ。北九州市立大学卒業。高等学校教諭として38年間勤め、その間、司書、司書教諭資格を取得し図書館教育にも携わる。定年退職後、『行橋市史』編纂に従事、行橋市図書館長を務める。小倉郷土会、美夜古郷土史学校会員。著書に『京築文学抄』（美夜古郷土史学校）、『京築の文学風土』（海鳥社）、『京築の文学群像』（花乱社）、『村上仏山と水哉園』（同）など。

佐野（さの） みどり 〈学習院大学名誉教授・國華主幹〉

1951年、東京都生まれ。東京大学大学院博士課程満期退学。博士（文学）。武蔵野美術大学・成城大学を経て、学習院大学教授。2021年学習院大学定年退職。専門は日本美術史、芸術学。特に「源氏物語絵巻」など絵巻物に造詣が深い。著書に『じっくり見たい「源氏物語絵巻」』（小学館）、『風流造形 物語』（スカイドア、第一回紫式部学術賞）、『源氏絵集成』（藝華書院）など多数。

小川（おがわ） 秀樹（ひでき） 〈行橋市歴史資料館館長〉

1962年、福岡県北九州市生まれ。立正大学卒業。1989年行橋市役所に入職し、文化財専門職員として行橋市の文化財保護行政に従事。歴史資料館の開館、御所ヶ谷神籠石、福原長者原官衙遺跡などの発掘調査、史跡整備に携わる。2023年より現職。近年は「豊前国府 九州最大級の政庁か」『季刊考古学』152（雄山閣）、「海軍築城航空基地稲童掩体と関連遺跡」『日本考古学』57（吉川弘文館）などを執筆。

島尾（しまお） 新（あらた） 〈学習院大学教授〉

1953年、東京都生まれ。東京大学大学院修士課程修了。東京国立文化財研究所・独立行政法人文化財研究所、多摩美術大学を経て、2012年より現職。専門は雪舟を中心とした室町時代の絵画史。また、中国・朝鮮を含めて現代に至る水墨画の歴史を研究。近年やや沈滞気味の水墨画を復興する活動にも携わっている。著書に『水墨画入門』（岩波書店）、『画聖 雪舟の素顔』（朝日新聞出版）など多数。

講　演

末松謙澄という人 ―イギリス留学までを中心に―

小倉郷土会会長・行橋市文化財調査委員　城戸　淳一

多才多能な巨人

末松謙澄は「知の巨人」、「マルチ人間」、「多才多能の巨人」などと称され、幅広い分野にわたって活躍をした。和漢の詩人、文章家、翻訳家、政治家、歴史家などの顔を持っていた。三宅雪嶺は「多能にして特に文才に長じ、青萍と号し、述作する所多し。『羅馬法典解』より『谷間の姫百合』等多数に上るが、万能余りて一心足らざるの憾みあり。果たして如何なるに最も長ずべきか明らかならず」とも評している。確かに謙澄は「万能」の才に富んでいた。しかし、伊藤博文の女婿という目で見られることがあったが、辛口の評で知られる『朝野人物評』では、「仮令（たとえ）伊藤伯の婿君たる光栄を荷はざるとも、今の如き才を得たるや固より疑なし」とも評している。

近代国家として歩みは始めた明治時代は「三百年続いた徳川幕藩体制が明治維新によって崩壊し、近代国家形成へと歩み始めた転換期に於いては、時代が創り、人が時代の思想を創ると言っても過言でない。」（山崎一穎著『森 鷗外 国家と作家の狭間で』）。謙澄もまさに明治維新と共に生きていたといえる。「国家」の「裨益」になるためだと著書にたびたび記している。

先祖は城井宇都宮の家臣

末松謙澄は安政２年（1855）８月 12 日、豊前国京都郡前田村に生まれる。末松家の祖先は城井宇都宮家の家臣だった。天正年間、宇都宮家の子息を守って仲津郡宮市に移り住んだといわれている。その後、庄屋、大庄屋など農村の指導者になっていく。

謙澄の父房澄（七右衛門・号は臥雲）と母伸子の四男として生まれた。房澄は庄屋、大庄屋として有能かつ剛毅な人で、郷土の発展のために尽力した。たとえば、新田開発、井堰の建設、ため池修造、河川堤防の改修など治山治水事業の功績を残している。

父、兄も文学を好む

父房澄は余暇に国学、漢学を学び、和歌などの作品を残している。長男である兄房泰は謙澄より十四歳年長であったが、漢詩、国学、和歌、長歌を学び、文才を発揮している。「門司新報」の文芸欄に自作の作品を発表すると共に、俳句、短歌の選者をつとめている。とくに長歌を好んだ。著書に『冠詞例歌集』（明治 33 年刊）がある。

『湖月抄』を所蔵

父房澄のころであろうか、『湖月抄』（『源氏物語』の注釈書、北村季吟著）を所蔵している。謙澄は父、兄たちが『源氏物語』について話すのを聞いていたかもしれない。ただ、謙澄自身『源氏物語』の文体について、余り好きでなかったという。この『源氏物語』については『冠詞例歌集』の中に収録された謙澄の「和歌和文に就て」の項が参考になる。

この『源氏物語』についていえば、師の佛山が教えを受けた原古處は、『源氏物語』に関心をもって「讀源語雑詠十首」と「讀源語五十四首」等の漢詩を残している。この話を謙澄は佛山より聞いていたかもしれない。ただ佛山がどれほど『源氏物語』について関心を抱いていたかわからない。

漢詩人村上佛山の「水哉園」に入門

末松家と村上家は親しくし、父の末松房澄はたびたび村上家へ行き来していた。末松家の男の

子たち五人はみんな水哉園に入門している。村上佛山はこの房澄の六十歳のお祝いに「末松臥雲六十壽詞（長寿の祈りの言葉）」と題して七言律詩を贈っている。「宜（むべ）なるかな、先生臥雲と号す、急流勇退塵紛に謝す、一家資産田園に富み、諸子の名声蘭蕙（らんけい）に芬たり（長子三子皆朝に仕え、顕官たり）、長短歌成り俗調無く（瑞穂集等の歌集有り）、東西有足奇文有り（東西遊約行有り）、知るべし 今より後に壽に壽を加えて、高枕悠々誰ぞ君に及ばんや」。佛山が羨むほど末松家の子どもたちの活躍ぶりであったが、不幸なことに一揆で家を焼かれたため急に経済的には苦しくなったようである。

謙澄は父の 36 歳の時の子どもである。江戸時代の庄屋、大庄屋の子弟は親、兄弟から教えを受けるか、家庭教師をつけるか、寺子屋で学問の基礎的なものを習っていた。謙澄の場合も同様であったと思われる。

その後、慶應元年（1865）8 月、10 歳の時に佛山の水哉園に入門している。

師佛山と共に生活して大きな影響を受ける

「慶應元年（1865）秋八月、予年十歳始めて、先生の門に入り、先生に親しく大学句読授けられる、翌慶應 2 年、御変動（小倉藩と長州藩の戦争）がおこる」（佛山は 57 歳であった。謙澄の「亡師佛山を祭る文」明治 12 年 9 月に師の佛山先生が亡くなり、その訃報を英国・ロンドンで聞いて、佛山先生との思い出を記したもの）

この戦争に乗じて一揆が起り、末松家は家を焼かれる。このとき、他の多くの大庄屋、庄屋、商家が焼き打ちにあった。「我が家に及ぶ、家兄軍に赴いて一家離散」となる。謙澄の身の上を哀れんだ佛山は、一時、水哉園に引き取る。塾は閉鎖されたが、その寂しい塾で佛山はその謙澄を吾が子のように面倒を見て、教育した。

当時、大きな私塾では入門して間もない者が師匠から直接教えを受けることは余りなかった。世にいう師弟関係だけでなく、吾が子のように接してもらった。佛山とともに寝食を共にし、直接、教えを受けた。そして、佛山の深い学問のみならず、温厚篤実、人情味のある師に接して、多感な少年は大きな影響を受けた。謙澄にとっては、この佛山と生活して学んだ数月（3 ヶ月間）が生涯の大きなバネとなって、6 年間の水哉園時代は充実したものであった。謙澄はいう、この時期に「ほぼ和漢書を習い終えた。今日、学術、文章で人後に落ちないのは、この時の佛山先生の教えを受けた賜である」と記す。

水哉園の教育

佛山の水哉園について少しふれたい。村上佛山の水哉園の教育の特色の一つは、作文、作詩、会詩、吟行が多かった。教育の目標の一つとして、漢詩を自在に詠み、その心情を大切にした。当時、全国的に私塾でうまくいった所は菅茶山、広瀬淡窓、旭荘、亀井昭陽なども詩人として著名だが、私塾として隆盛であった。50 年間に 3000 人の門人たちを輩出し、豊前国の数少ない庶民の教育機関であった。

青雲の志を抱き上京

その後の謙澄について年表形式で記していく。

- 明治 4 年（1871）、16 歳で上京。大槻磐渓、近藤真琴に学ぶ。
- 明治 5 年、佐々木高行（土佐出身、参議、工部卿）の書生になる。師表学校（東京師範学校）に入学後、退学。

その後、高橋是清（後の総理大臣）と知り合う。謙澄は漢学を、高橋は英語を互いに教え合う。二人で英字新聞を翻訳して新聞社に売り込む。

・明治７年（19 歳）、東京日日新聞の編輯長・社長の福地源一郎を知り、記者として入社。笹波萍二のペンネームで社説を書くことになる。この社説が評判となる。
この福地の紹介で伊藤博文に紹介される。これが一つの大きな転機となる。後日、伊藤は岳父となる。
・明治８年（20 歳）、12 月、伊藤博文の推薦で官吏となり、正院御用掛を申し付けられる。特命全権辨理大臣・黒田清隆に随行して渡朝、日朝修好条規の起草に加わる。
・明治９年１月 15 日の「東京日日新聞」の記事によれば、「弊社の前編輯長末松謙澄は、何処に何して居るぞと、昨日町内掛りを以て東京裁判所からお尋ねで五座りましたから、末松謙澄は去る明治８年 12 月 28 日まで新聞編輯を総理して居ましたが、同日正院から御用掛りを仰せ付けられましたから即日編輯長差し免じましたが、同人は同日また特命全権辯理大臣の随行として、朝鮮へ差し遣され候旨を仰せ渡され、翌 29 日に井上副全権大臣と共に横浜を出帆いたされましたが、当時は何処に何して五座るやら慥と分かり兼ねます。多分まだ朝鮮へは到着いたされますまいから、海上に居られませうとお答へ申しました」。この記事によれば、謙澄は編輯長になっていたが、官吏への転身は突然であったようだ。
・明治９年（1875）４月、工部権少丞、７月法制局勤務
・明治 10 年１月、太政官権少書記官、６月、山縣有朋の引き抜きで兼補陸軍省七等出仕、征討総督本営附。西郷隆盛に降伏をすすめた山縣の一文は謙澄の草といわれている。
・謙澄は鹿児島より東京への帰途に故郷に立ち寄り、師の佛山に会った。二人は再会を喜んだが、また涙の別れをしなければならなかった。

念願のイギリス留学

・明治 11 年（1878）２月、渡英、英国公使館附一等書記見習。英・仏の歴史編纂の方法の調査の任を兼ねていた。

まとめ

謙澄の生涯をみていくと、決して平坦な道ではなかった。「予ハ此書ノ邦人ニ裨益アルヲ信ズルガ故ニ公務ノ余暇孜孜怠ラズ百事ヲ擲テ以テ之ヲ完成セリ」（『防長回天史』の「再販緒言」）、「（毛利）公爵家ノ容認を得テ無慮十年、（中略）一切ノ政治上、社交上ノ功名モ義務モ之ヲ擲チ日トナク夜トナク、心若シクハ手ヲ此事ニ労セザルノ時殆ド之ナク」（『日本美術全書沿革門』の序文）などで知ることが出来る。

謙澄の著書の中に「国家」、「郷土の発展」ということばがよく出てくる。事実、謙澄は西洋の文化を日本に翻訳紹介し、反対に日本の文化、歴史を英文に翻訳して西洋諸国に紹介している。これは近代国家として出発した日本のために必要な事業の一つであった。

謙澄が郷土のために尽くしたものも大きい。門司港の開港、鉄道敷設、製鉄所誘致、奨学金財団の充実、新聞社の育成などがある。

謙澄のことを「多才多能の巨人」、「知の巨人」などと称しているが、その陰には、たゆまぬ精進と多くの自己犠牲のうえの成果であることを忘れてはならない。さらに持ち合わせた豊かな人間性と幸運とが相まったことも事実であろう。それは理解ある両親であり、優れた教育者であった佛山先生であり、佐々木高行、高橋是清、福地源一郎、伊藤博文などとの出会いでもあった。

伊藤博文の娘である生子夫人とは仲のよい夫婦であった。謙澄の没後に出版された追悼歌集『蓮葉集』に収録さている生子夫人の歌を紹介したい。

はかなくも かへらぬ水の うきくさの　あともしばしは 世にのこれとぞ

招待講演

末松謙澄と源氏文化 ―江戸から現代へ―

学習院大学名誉教授・國華主幹　佐野　みどり

インターネットで末松謙澄と入力して検索をかけると、ただちにかの巨大データサイトWikipediaの当該タイトルページが出てきます。そこには、「末松（すえまつ）謙澄（けんちょう）（安政2年8月20日（1855年9月30日）－大正9年（1920年）10月5日）は、日本の明治から大正期のジャーナリスト・政治家・歴史家」とあります。たしかに末松謙澄は明治の元勲伊藤博文の女婿にふさわしく、明治政府において官僚や政治家として重責を担うという公の顔を持った人物でした。その一方で彼は、英国ケンブリッジ大学仕込みの法学や歴史学の専門家として本領を発揮し、文筆活動にも成果を残しています。歌舞伎の近代化運動にも注力していますし、恋愛小説の翻訳も出しています。圧倒的な知的能力をもって多面的に活動できたオールラウンダーの彼の生涯は、近代日本が必要とし、かつ可能とした偉人であったといえます。まさしく稀に見る知性の持ち主であったわけですが、なかでも注目されるのが、世界で初めて『源氏物語』を翻訳し、この類稀なる十一世紀初めの本格小説の存在を西欧に紹介し、東洋の彼方の小さな国が成熟した文化の国であることを知らしめたことでありましょう。

板谷桂舟筆源氏物語箒木図

末松謙澄は、ケンブリッジ大学在学中の明治15年（1882）に「GENJI MONOGATARI」を刊行しています。これは、一般に『源氏物語』初めての英訳として世評高いアーサー・ウェイリーの「The Tale of Genji」（1921年から1933年）の刊行の40年も前の偉業でありました。残念なことに全訳ではなく、物語の前半部17帖までという半端な形で終わり、その続編が世に問われることはありませんでした。この末松版英訳源氏物語の特質は、平安時代の特徴的な風俗を当時のそれに置き換え、物語世界を異なる文化に立つ人々にわかりやすく伝えようとしていることです。それは末松が英語から日本語に翻訳した『谷間の姫百合』（原著はバーサ・M・クレーの『Dora　Thorn』）が登場人物の名前を日本名にしていることにも通じる、彼流の異文化の翻訳手法といえましょう。英語から日本語へ、日本語から英語へ、彼が読者に対して求めたのは、異文化に対するエキゾチックな関心ではなく、普遍的な人間の心情への共感であったと考えられます。末松謙澄訳の「GENJI MONOGATARI」に私は、現代の『窯変源氏物語』（橋本治著）や漫画『あさきゆめみし』（大和和紀作）にも通ずる『源氏物語』愛―物語世界の本質への共感―を感じます。

幕末に生を受け、青春を明治という近代の幕開けとともに過ごした末松謙澄は、『源氏物語』とどのように触れてきたのでしょうか。憶測でしかありませんが、少年期に受けた国学の学びの中での古典教育はもちろんのこと、末松

謙澄は彼の家庭環境の中で自然と『源氏物語』に触れていたのではないか、文学という文字の世界としてだけではなく、源氏の美術に接し慣れ親しんでいたのではないかと想像します。江戸時代の識字率は世界史的に見ても驚くべき高さですが、日本の近世において、『源氏物語』の文化は特権階級に囲い込まれていたのではなく、広く浸透し庶民の生活をも彩っていたことに、私は日本という文化風土の特性を見る思いでおります。

森戸果香筆源氏物語浮舟図

『源氏物語』は日本の古典文学の達成ともいうべき作品ですが、時代の変化にも変わらず愛され揺るぎない地位にあり続けてきたのは、この作品が貴族や上流武士のみならず市井の人々に至るまで、様々なニーズに応える美術工芸を展開していたことも大いに関わっていると私は考えます。平安時代の『源氏物語』本文は、難しくすぐには読みこなせなくとも、美術によって王朝物語世界を愛でることができる、美術を入り口に物語の筋や心理に思いを寄せることができる、『源氏物語』は傑出した文化装置として平安時代から近代まで君臨し続けた稀有な小説であったと言えます。

これら『源氏物語』を題材とする美術工芸を＜源氏絵＞と総称しますが、最古の源氏絵「国宝源氏物語絵巻」（十二世紀）以来、数多くの作品が現代まで大事にされ伝来してきました。おそらくは上皇や女院という宮廷の頂点にたつ人々を楽しませた「国宝源氏物語絵巻」（徳川美術館・五島美術館）、権力をほぼ手中に収めた織田信長が上杉謙信に贈り自身の政治的優位性を示威した「源氏物語図屏風」（十六世紀、現存は確認されず）、三代将軍家光の娘千代姫の婚礼道具として誂えられた初音の調度（徳川美術館）などの特権的な作品制作の一方で、十六世紀以降、素人の女性が写し続けた「白描源氏物語絵巻」や源氏主題の浮世絵や衣装、カルタや刷り物、そして晴れの場を飾った源氏絵の金屏風など、素材も形式も大小もさまざまな源氏絵が世間に流通するのでした。庄屋や商家の床の間には、文人画のほか源氏絵の掛け軸も掛けられました。源氏絵は貴族文化の一端であると同時に、それを愛でたのは貴族や上流武家だけではありませんでした。いわば国民国家の先駆けのような源氏文化が近世後期には浸透していたのであります。このような源氏文化の背景のもとで、江戸後期の馥郁たる教養教育を得た末松謙澄は、その傑出した知力をもって、自ら楽しみなずんでいた『源氏物語』の翻訳事業へと向かったのではないでしょうか。

今回の展示は、そのような江戸後期の源氏文化を垣間見ると同時に、大正・昭和に至る近代の源氏絵の一端を愛おしむというコンセプトで構成して頂きました。けして特権的な場にのみにあったのではない、＜源氏絵の世界＞を楽しんでいただければ幸いです。

企画展解説

『源氏物語』の時代と京都平野

行橋市歴史資料館館長　小川　秀樹

紫式部と豊前国

源氏物語の時代、日本は六十六の国に分けられ、それぞれの国は都から派遣された国司によって統治されていました。国司の最上席である国守は受領とも呼ばれました。受領は一国の支配を委ねられることからさまざまな利権があり、任官を望む中級、下級貴族は少なくありませんでした。紫式部の父、藤原為時は越前守や越後守を務め、夫、藤原宣孝は筑前守や山城守を務めています。『源氏物語』にも空蝉の夫の伊予介や、その子紀伊守、明石の入道（前播磨守）など多くの受領たちが登場します。豊前国もこうした受領（国司）によって治められていたのです。あまり知られていませんが、都から豊前国に赴任した受領に紫式部の祖父である藤原雅正がいます。豊前守を務めた雅正は歌人で、紀貫之とも大変親しく二人の交流を示す和歌が『後撰和歌集』に収められています。曾祖父藤原兼輔、祖父雅正、父為時と代々続いた文人の家系が紫式部の優れた文才を育んだものと思われます。

紫式部の家系

雅正などの受領が政務を執ったのは国府の政庁である国庁（国衙）です。このころの豊前国庁は、現在の京都郡みやこ町の国作地域にあり、周辺には国司の館や正倉、国分寺などの官立寺院や国司が参拝する神社（総社）などが置かれ、豊前国の政治、経済、文化の中心でした。平安京よりはずっとコンパクトですが、都市的空間が広がり、都にならった儀式なども行われていたのです。

豊前国府国庁跡
（写真提供 みやこ町教育委員会）

紫式部の夫、藤原宣孝も宇佐使として豊前国を訪れたことがあります。宇佐使は天皇の即位や国家の大事などの際、宇佐八幡宮に幣帛を献じて祈願するために都から派遣される勅使です。宣孝が宇佐に向かったのは紫式部と結婚した翌年の長保元（999）年のことなので、帰京した宣孝から式部は豊前国の風物や宇佐八幡宮の話を聞いたことでしょう。式部自身が九州の地を踏むことはありませんでしたが、祖父や夫を通して、この地域とつながっていたのです。

都から伝わった信仰や娯楽

源氏物語が書かれた頃は、仏法が廃れ、世が乱れる末法の時代がもうすぐやって来ると信じられていました（末法思想）。不安を抱えた人々は経典を後世に伝えるため、経筒などに入れて経塚に埋納し、この行為に自らや一族の極楽往生を託しました。寛弘４（1007）年に藤原道長が奈良県大峰山に納経したのが国内最古の経塚です。京都郡みやこ町の下田経塚から出土した経筒には、大

下田経塚から出土した経筒と経巻
（個人蔵 写真提供 みやこ町教育委員会）

治２（1127）年に宗形氏という女性が納経したことが刻まれ、経塚信仰の地方への広がりと、納経に女性も参加していたことがわかります。

物忌（ものいみ）は平安時代に、都で盛んに行われていた風習です。「悪い夢を見た」「占いで凶事が予知された」。こうした時、屋敷の門を閉ざして外出を控え、人と会わないのが物忌です。物忌であることを知らせるため、物忌札（ものいみふだ）を部屋の出入り口に下げたり、門前に立てたりしました。『源氏物語』にもしばしば物忌が登場します。なかには来客や出勤を拒否するために物忌を利用する不届き者もいたようです。行橋市の椿市廃寺から木の板に「今日（きょう）物忌（ものいみ）」と墨で書かれた平安時代の物忌札が出土しています。ほかにも病気や祟りなどの災厄を防ぎ、願い事をかなえるため、さまざまなアイテムがありました。その一つが、現在の御守りに通じる呪符（じゅふ）です。この呪符もみやこ町の豊前国府跡から出土しています。これらの出土品からこの地域にも、都と同じような信仰が伝わっていたことがうかがえます。

平安時代は娯楽や遊戯を洗練させた時代でもありました。こうした娯楽も都から地方へと伝わっていきました。『源氏物語』には碁を打つ場面がしばしば描かれ、空蝉（うつせみ）や紫の上など女性たちも碁を嗜んでいたことがわかります。豊前国府跡や行橋市の崎野遺跡からも当時の碁石が出土しており、碁を楽しむ人々の姿が目に浮かびます。

官人の往来と京都平野の文化

文化の地方への波及に、人事異動などで定期的に都と地方を移動する官人たちが果たした役割は少なくなかったと思われます。九州と都との交通は、奈良時代には陸路が中心でしたが、平安時代になると海路の利用も次第に多くなります。古代において豊前国の海上交通の拠点となった港は『類聚三代格（るいじゅさんだいきゃく）』に記される草野津（かやののつ）です。近年の発掘調査でこの港は行橋市の吉国から延永周辺にあったことがわかりました。官人たちも都との往来にこの港を利用していたことでしょう。当時の船旅は沿岸部を航行し、夜間や風雨の際は航海せず港に停泊しました。このため都まで15日前後要したと思われます。

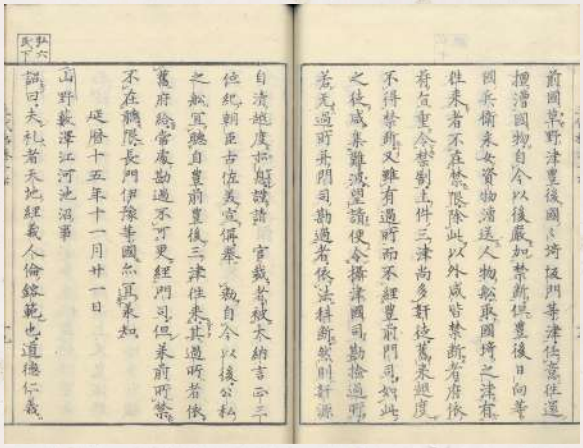
地方に派遣される受領たちは、貴族としての身分は必ずしも高くはありませんが紫式部の父為時や祖父雅正をはじめ紀貫之（土佐守）や清原元輔（肥後守、清少納言の父）など一流の知識人、文化人も多く、こうした官人たちが都の文物や情報をもたらし、地方の文化レベルを引き上げることに大いに貢献したものと思われます。この地でも雅な和歌が詠まれ「みやこ」の名に恥じぬ文化が花開いていたことでしょう。

椿市廃寺から出土の物忌札
（行橋市教育委員会 蔵）

豊前国府跡から出土した呪符
（みやこ町教育委員会 蔵）

豊前国府跡から出土した碁石
（みやこ町教育委員会 蔵）

関連資料



『類聚三代格』（個人蔵 写真提供九州歴史資料館）

『類聚三代格』は平安時代の法令集。これに収録された延暦 15（796）年の太政官符に草野津の名前が見える（写真の 1 行目）。それまで規制していた草野津からの往来や物資の搬送を承認する通達で、古くからこの港が物流や人の往来に盛んに使われていたことが読み取れる。

延永ヤヨミ園遺跡（写真提供 九州歴史資料館）

『類聚三代格』に記される草野津と推定される遺跡。草野津は豊前国を代表する港で、官人たちも利用した。平安時代には港の位置はもう少し東側（写真の上側）に移っていた可能性がある。

乗馬用の鞍
（所蔵 写真提供ともに九州歴史資料館）

延永ヤヨミ園遺跡出土から出土した 8 世紀～12 世紀の鞍の前輪と考えられる。表面被膜の分析結果から、黒色の漆が塗られていたこともわかっている。官人たちも移動に馬を用いるため、周辺で乗馬用の馬が飼育されていた可能性が高い。

『湖月抄』（行橋市教育委員会蔵）

『湖月抄』は北村季吟よって江戸時代の延宝元（1673）年に著わされた『源氏物語』の注釈書で全 60 巻。江戸時代を通して最も流布した注釈書で、謙澄の『源氏物語』英訳にも用いられたと考えられている。写真の資料は末松家の旧蔵品である。

▶末松謙澄が英訳した『源氏物語』（個人蔵）

末松謙澄の英訳本がイギリスで初めて出版されたのは明治 15（1882）年である。資料は左から丸屋（丸善）明治 27（1894）年版、三角社昭和 9（1934）年版、Chares E.Tuttle Company1992 年版、同 2018 年版

末松謙澄略年譜

年号	西暦	事　項
安政２年	1855	８月20日　大庄屋末松房澄、伸子の四男として豊前国京都郡前田村（現福岡県行橋市）に生まれる。
慶応元年	1865	８月　村上仏山の私塾水哉園に入門。
明治４年	1871	上京し、大槻磐溪、近藤真琴等に学ぶ。
５年	1872	師表学校（東京師範学校）に入学（後に退学）高橋是清と知りあい、謙澄は高橋から英語を学び、高橋に漢学を教える。
７年	1874	東京日日新聞に入社し、社長福地源一郎（桜痴）と出会う。
８年	1875	伊藤博文の知遇を得、12月 正院御用掛に任じられ官界に入る。
９年	1876	１月　特命全権弁理大臣、黒田清隆に随行し日朝修好条規締結のため朝鮮に赴く。
		３月　帰国。４月　工部権少丞となる。７月　法制局勤務となる。
10年	1877	１月　太政官権少書記官、法制局専務。６月　山県有朋の差配で、兼補陸軍省七等出仕、西南戦争の征討総督本営付となる。この際西郷隆盛への降伏勧告状を起草したといわれる。
11年	1878	２月　英国公使館付一等書記見習の肩書で、歴史編纂方法調査のため渡英。
14年	1881	10月　ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジに入学。
15年	1882	英訳『源氏物語』を刊行。
17年	1884	５月　ケンブリッジ大学を卒業。
19年	1886	３月　帰国。文部省参事官となる。４月　内務省参事官に転任。
		８月　演劇改良会を提唱し発足させる。
20年	1887	３月　内務省県治局長。４月　初の天覧劇を演出。
21年	1888	６月　文学博士の学位を授けられる。
22年	1889	４月　伊藤博文の次女生子と結婚。
23年	1890	７月　第一回衆議院議員選挙に当選（福岡県第八区）。
25年	1892	２月　第二回衆議院議員選挙に再選。９月　第二次伊藤内閣の法制局長官に就任。
26年	1893	10月　内閣恩給局長を兼任。
27年	1894	３月　衆議院議員に三選。８月　朝鮮の視察に赴く。
28年	1895	２月　朝鮮政府への借款供与交渉のために渡朝。10月　男爵に叙爵される。
29年	1896	６月　貴族院議員となる。
30年	1897	１月　毛利家歴史編輯所総裁を委嘱される。
31年	1898	１月　第三次伊藤内閣の逓信大臣に就任。
33年	1900	９月　伊藤博文主導の立憲政友会結成に創立委員として加わる。
		10月　第四次伊藤内閣の内務大臣に就任。
37年	1904	２月　日露戦争に際してヨーロッパに親日世論を形成するためイギリスに向かう。
39年	1906	２月　帰国。３月　枢密顧問官となる。
40年	1907	４月　帝国学士院会員となる。９月　子爵に陞爵される。12月　宮内省御用掛ならびに韓国皇太子殿下御教養掛に任じられる。
大正７年	1918	４月　法学博士の学位を授けられる。
９年	1920	６月『修訂 防長回天史』全篇脱稿。
		10月５日　逝去。享年65。

編集・発行

行橋市教育委員会

〒824-8601

福岡県行橋市中央一丁目１番１号　Tel：0930-25-1111